渡辺一夫著作集 6

筑摩書房

渡辺一夫著作集6　フランス文学雑考　上巻

一九七一年二月二十五日　初　版第一刷発行
一九七七年五月　十　日　増補版第一刷発行

著者　渡辺一夫
発行者　井上達三
発行所　株式会社筑摩書房
東京都千代田区神田小川町二―八
電話　東京二九一―七六五一
郵便番号　一〇一―九一
振替　東京六―四一二三
印刷　株式会社精興社
製本　和田製本工業株式会社
©渡辺芳枝一九七七
(分類)1398(製品)74806(出版社)4604

フランス文学雑考　上巻　目次

端　書 …… 3

A　フランス語雑録（一九二七年―一九五五年）

末　技 …… 9

Argot 漫語 …… 16

門前小僧読経（réaliser について） …… 26

「イスパニャ城」Châteaux en Espagne 物語 …… 34

象と盲人の話（古文の解釈） …… 44

青猿 Singe vert 縁起 …… 53

Avec 事件 …… 59

粋 Chic でない話 …… 64

ままならぬ浮世かな！（tout について） …… 77

フランス人の言語教育 …… 88

僕の仏学事始抄 …… 94

B　フランス文学雑録（一九三三年―一九六二年）

古典主義（クラシシスム）について　……107
バロック的なバロック談義　……111
フランス象徴詩派の研究について　……117
フランスの「文芸サロン」　……124
モラリスト　……135
所謂フランス的明晳さについて　……144
フランス心理分析小説における人間　……155
敗戦国フランスと文学（一・二・三）　……179
フランス文学管見　……200
砂糖とフランス文学　……220
所謂新ユマニスムについて　……228

C　フランス中世文学雑録（一九二八年―一九六三年）

「中世文学集」解説　……255
歴史のうらおもて（ジャンヌ・ダルクのこと）　……266
アベラールとエロイーズ（一・二）　……286

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

『結婚十五楽』（カンズ・ジョワ・ド・マリヤージュ）……309
フランスの笑劇（ファルス）……326
『ピエール・パトラン先生』解説……343
『ジャン・ド・パリ物語』……352

D　フランス王朝文学雑録（一九二七年―一九七〇年）

パスカル遠望……361
デカルトの詩……372
シュヴァリエ・ド・メレについて……377
『クレーヴの奥方』について……391
ラ・ロシュフォーコー公爵（一・二）……401
『新エロイーズ』の思い出……408
モンテスキューの歎息（ためいき）……411
『カンディード』を読む……429
ある盲目の貴婦人について――デュ・デファン夫人のこと――……433
シャルル・ペローの『妖精物語』について……441
カゾットのこと……444

フランス文学雑考　上巻

端書

本巻のA「フランス語雑録」には、大体二十代の終りから五十代にかけて私が書き散らしたフランス語フランス文法についての雑文が収められた。ここに集められたもの以外に、フランソワ・ラブレーの語法や文体に関する拙文もあるが、それらは、ひとまとめにして、『**ラブレー雑考**』上巻に収録した。いずれもフランス語学や文法の専門研究をなし遂げられず、ただその門前に佇立しながら、進退をきめかねていた私の記録にしかならない。なかには、現在既に解決済みになっている問題に取り組んで周章狼狽していた「記録」もある筈である。同学の方々の憫笑を誘うだけのことであろう。「フランス人の言語教育」と「僕の仏学事始抄」とは、随筆的雑文であるから、『偶感集』にでも収められるべきものかもしれないが、愚にもつかぬことが書いてあるとしても、本「雑録」の締めくくりぐらいにはなるかもしれぬと思って、敢て収録した。各雑文の配列は、大体執筆年代順にしてある。

B「フランス文学雑録」には、私が三十代の頃から四十代にかけて、求められるがままに書き綴った雑録を収めた。六十代の初めに綴ったものも一篇加えてあるが、文体内容とも、昔のものと著しく異り、感慨深いものがある。これらの雑文は、フランス文学全般に亙る諸問題に関して概論風な説明をしたものであるが、概論風と言えば甚だ聞えがよいだけのことであり、いずれも材料の不備や独りよがりのところが眼立つだけのものばかりである。再録するに当り、能う限りの補修を加えはしたが、多少の化粧でごまかし切れるものではなかった。一切が所謂「反

面」的な意味しか持っていないかもしれぬ。各雑録の配列順序は、執筆年代によらず、若干の時代的配慮を加えた主題配列に従った。

各時代のフランス文学について書き綴った雑考中、十六世紀（ルネサンス）文学関係のものは、本巻から除き、別に『**ルネサンス雑考**』上・中・下の三巻にまとめた。従って、これらは、本巻には収められず、それ以外の時代の作家・作品について綴られた雑文を、**C**「フランス中世文学雑録」**D**「フランス王朝文学雑録」の二つに分けて収録した。

前者には、二十代の終り頃から六十代の初め頃までの間に、求められるがままに書かれたものが集められたが、中世と言っても、十四・十五世紀に関するものばかりである。それ以前の文学や作家は、若干囓ったとしても、全く歯が立たなかったせいか、雑文に綴るだけのものすら得られなかったと思われる。十四・十五世紀に関するものにしても、一つとして私に歯こぼれを来さなかったものはなかった。拙文の配列順は、執筆年代にはよらずに、取り扱われた作家・作品の年代順に大体従ってある。

後者即ち**D**「フランス王朝文学雑録」には、二十代の終り頃から五十代の初め頃までに、十七世紀及び十八世紀フランス文学について、求められるがままに書き綴った雑文が収めてある。一九七〇年になってからのもの（「モンテスキューの歎息」）が一篇添えてあるが、全くの蛇足だったかもしれぬし、若い頃の文章と比較してみて、なにがしかの変化が出ていれば、ほんの少しぐらいは意味があるかもしれぬ。各拙文の配列は、執筆年代にはよらずに、対象となった作家・作品の年代順に大体従っている。

今さら申すのも変であるが、本巻を編輯しながら染々と感じたことは、日頃私は学者になり切れなかったと思っていた反省の確証を得たことである。もし私が学者だったら、このように、「求められるがままに」何でもかんでも雑文の種にはできる筈はないからである。フランス語に Polygraphe（雑文家・何でも書く人）という言葉があ

るが、何かの資格が私にあるとすれば、この「ポリグラフ」ということになるだけだろう。

書かでもよいこと、書くべからざることを自制もなく書き綴ったことは明らかであり、いずれも私の思い出を唆るものばかりであるにしても、他の方々のお役に立つものは、恐らくないだろう。ただ同学の方々が調査なさる暇がなかったようなことが、一つでも二つでも、これらの雑文集のなかにころがっていたら、と希うのが目下の私のはかない願いである。

一九七〇年三月

渡辺一夫識

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

A

フランス語雑録（一九二七年―一九五五年）

末技

一

ジャン・ラシーヌ Jean Racine の劇に、次のような文句があります。

（1） Ariane, ma sœur, de quel amour *blessée*
Vous *mourûtes* aux bords où vous *fûtes laissée*.

（2） Mais tout dort / et l'armée / et les vents / et Neptune.

（3） Pour qui *sont ces serpents* qui *sifflent sur* vos têtes.

第一文は、ラシーヌの『フェードル』Phèdre の第一幕第三場で、フェードルが、侍女エノーヌ Œnone を相手に古典劇らしい情態説明（エクスポジション）をいたす時に申す言葉。第二文は、同じくラシーヌの『イフィジェニー』Iphigénie の第一幕第一場で、ギリシャ王アガメムノン Agamemnon と、その臣アルカス Arcas とが、深夜の陣営話を始めます時にアルカスの申す言葉。第三文は、これまた同じくラシーヌの『アンドロマーク』Andromaque の第五幕第五場で、狂乱したオレスト Oreste が、友ピラード Pylade に申す最後の台詞の一句です。

私が、初めて、これらの傑作を通読致しました時には、お恥ずかしいことながら、前記の三文のいずれにも目を止めませんでした。後、学校で西洋人の先生の講義を拝聴したり、極めて初等の文学史を読んだりしまして、漸く、これらの文章の、所謂技巧が耳に止まるようになりました。原文中に、イタリックや区切線などを使って置きましたから明かだと思いますが、先生のお話や初等な文学史によりますと、次のようなことになるのだそうです。つまり第一文では、mourûtes; fûtes; blessée; laissée. のごとく、同じ音が、ならんで居ります。そのため、宿命的な恋に悩み悶えるフェードルの心のリズムが、よく現されているのだそうです。また、第二の文章は、区切線で示しました通り、ポツリポツリと切れて居ります。それは、寂寞たる露営の静けさを現しているのだそうです。また、第三の文章では、イタリックで示しました通り、Sの音が大変多いようですが、蛇が、シュッシュッと駛る様を髣髴たらしめるのだそうです。先生のお話を伺い、文学史を読みまして、初めて私は、成程と、思いましたが、今でも、成程そう言われればそうだと感心しています。

こうした技巧は、外にも沢山あるように思われます。少々古くなりますが、十六世紀に、小説家兼医学博士で、フランソワ・ラブレー François Rabelais という人が居ります。この人は、『ガルガンチュワとパンタグリュエル』Gargantua et Pantagruel という大変愉快な小説を作りました。これは大体、ガルガンチュワとパンタグリュエルと申す親子の大巨漢が、壮烈痛快なことをいたす話ですが、著者は、この大巨漢の一族の活躍に托して、自分の思想をのべたり時代を諷刺したりして居ります。全部で、五巻ですが、第三巻の序詞（プロローグ）のなかで、犬儒哲人のディオゲネスが、樽を転がして歩む様を、次のように描出しています。古い語綴ですが、察しはつく筈です。

Diogenes.....roulla le tonneau fictil qui pour maison luy estoit contre les injures du ciel, et, en grande vehemence d'esprit desployant ses braz, le tournoit, viroit, brouilloit, barbouilloit, hersoit, versoit, renversoit, nattoit,

grattoit, flattoit, barattoit, bastoit, boutoit, butoit, tabustoit, cullebutoit, trepoit, trempoit, tapoit, timpoit, estouppoit, destouppoit, detraquoit, triquotoit, tripotoit, chapotoit, croulloit, elançoit, charmailloit, bransloit, esbransloit, levoit, lavoit, clavoit, entravoit, bracquoit, bricquoit, blocquoit, tracassoit, ramassoit, clabossoit, afestoit, affustoit, baffouoit, enclouoit, amadouoit, goildronnoit, mittonnoit, tastonnoit, bimbelotoit, clabossoit, terrassoit, bistorioit, vreloppoit, chaluppoit, charmoit, armoit, gizarmoit, enharnachoit, empennachoit, caparassonnoit,……

樽をころがす動作を表すものとしては不適当な意義を持った動詞も沢山あるようですが、一気呵成に読みますと、何だか、ぐらぐらっといたしまして、樽がぐんぐん廻っているような気がします。ラブレーは、これに類した文章を、数多く作って居ります。こうした文体も、粗笨ではございますが、一種の技巧でしょう。

ラブレーと同時代に、即ち十六世紀に、「プレイヤード」Pléiade と申す詩歌の新流派があります。その頭領として、自他ともに許して居りました詩人で、ピエール・ド・ロンサール Pierre de Ronsard という人が、「ラ・フランシャード」La Franciade という叙事詩を作りまして、その序文で、次のようなことを申しました。「母音の A, O, U, 子音の M, B, 語尾に置かれる SS, また特に RR は、詩句において、鐘鼓の音となり、砲火の響きとなる」と。そのためか、当時の詩人のなかには、この文字の音を利用して、様々な「感じ」を出している者が、沢山います。なかでも、デュ・バルタス Du Bartas は、その点で有名です。次のような詩句を作って居ります。

Que ce fougueux cheual, sentant lascher son frein,

……

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com